令和六年度入学試験問題

# 国　語

（教員養成課程）

**注　意　事　項**

1　試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
2　問題冊子は表紙を含めて八ページです。
3　解答用紙は五枚、下書き用紙は二枚あります。
4　解答は指定された解答欄に記入すること。
5　受験番号は解答用紙の**全ての指定欄**に横書きで記入すること。
6　解答は縦書きとし、指定された字数にまとめること。句読点や括弧記号等も、一字分とします。
7　解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。**なお、いかなる理由があっても、解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。**
8　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

**問題**　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近年、経済のグローバル化やＡＩ化が加速度的に進み、メディア状況の激変は社会のあり方や人の感覚を根底から変質させている。学校現場におけるいじめや不登校などの学校の機能不全といわれる問題が後を絶たないが、こうした教育の諸問題も、近年のメディアの激変とそれに伴う人と社会の変質とは無関係ではないだろう。欧米でもこれらの教育に関する課題について、その解決に向けてさまざまなアプローチが試みられている。

ここで注目したいのは、二〇〇〇年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘックマン（James Joseph Heckman）の『幼児教育の経済学』にまとめられた研究である。（中略）ヘックマンによれば、乳幼児期において身につけておくべき力は、学力のような「認知的能力」ではなく、むしろ「社会情動的（非認知的）能力」、つまり①〈心の力〉なのではないかということである。

この「認知的能力」と「社会情動的能力」については、近年日本でも盛んに注目されて研究が進められている。これは、われわれが人生を力強く歩んでいくために備えている様々な力や特徴・性質を、大きく「認知的」なものと「社会情動的」なものに二分して整理し理解しようとするという考え方である。[*1]「認知的」とは、ＩＱに代表されるような知的能力を指し、言語や数の概念の理解とその活用、空間処理、知識の獲得や論理的な推論などが含まれる。これまで教育学の分野でいっていた、いわゆる「学力」に当たると考えられる。一方、「社会情動的能力」とはそれ以外の内容を指し、具体的には社会の中で適応的に生活し、また、心身ともに健康で自己実現をはかりながら生きていくことを可能にする、その意味で心理的、社会的な側面にかかわる人間の能力が想定されている。

（中略）

近年は、「社会情動的能力」つまり、目標の達成や情動の抑制、人との関係性の問題が、人の発達を考えるうえで重要な要因としてクローズアップされている。そこで、この「社会情動的能力」の問題について、本居宣長[*2]（もとおりのりなが）の思想の観点からは、どのような示唆が得られるのか、考えてみたい。（中略）

「もののあはれ」は宣長思想のキーワードであるが、それは宣長の独創ではなかった。日野龍夫（ひのたつお）は、同時代の②浄瑠璃に「もののあはれ」の語が多用されていたことや、当代の通俗文化に「もののあはれを知る」ことが人間の大切な価値と考えられていた事実を指摘している。浄瑠璃において武士は、「公的[*3]立場と私情の相剋（そうこく）に苦悩することを期待されている存在なのであり、「物のあはれを知る」とは、たとえ公的立場とａムジュンしようとも、私人としての情の発動を抑えないということであった」という。浄瑠璃や歌舞伎等にも通底しているとすれば、「もののあはれ」はむしろ庶民の人情、生活する者の「まことの情」の意味での「真情」に即した主情主義的人間観に通じると見ることができる。宣長は、こうした近世の町人の感覚とその人間観を、王朝文化のｂケイ

フに位置づけることによって、③儒教的人間観と対抗させて提示することができた。宣長は「もののあはれ」について次のように述べている。

④人のおもきうれへにあひて、いたくかなしむを見聞て、さこそかなしからめとおしはかるは、⑤かなしかるべき事をしるゆゑ也。是事の心をしる也。そのかなしかるべき事の心をしりて、さこそかなしからむと、わが心にもおしはかりて感ずるが物の哀也。（『紫文要領』）

⑥人の心をわが心に置き換えて慮る、それが「物の哀れ」であった。それはその気持ちを知るがゆえに可能なのである。まさに人が相手の心を慮り共感する。歌が生まれるのはそうした時であるという。宣長はさらに、「古今序に、やまと歌は、ひとつ心をたねとして、万のことのはとぞなれりけるとある。⑦此こころといふがすなはち物のあはれをしる心也」と述べ、生きとし生けるものには情があり、そのなかでも、人の心はとりわけ思いも深く「物のあはれ」を知る存在なので、すべての人に「歌なくてかなはぬ」ものだという。「事にふれて、そのうれしくかなしき事の心をわきまへしるを、物のあはれをしるといふ也」と述べ、「思ふ事なくては、歌はいでこぬ也」という。すべての人間には情があり、それは、ものやことに触れて動き、思う、その時に歌は自然に生まれる。人は歌がなくてはいられない、とまで彼は述べている。それは、事に触れわき上がる情としての「物のあはれ」の発露であった。

このように宣長は、「もののあはれ」は、人間の情がものやことに触れて動き、その時に歌が生まれると主張した。しかし、⑧他者との関係性について、彼が師と仰ぐ賀茂真淵とは明確な対照をみせている。（中略）

真淵が言うには、上代において「人のこころ」は「ひたぶるに、なほく」という状態、つまり純粋で素直だった。そして、「歌はただひとつ心をいひ出るもの」であり、歌の詞は心とそのまま結びついていると彼は考えていた。『にひまなび』で、歌は調べのあるもので、声に出して歌われるものであり、その中心は、「高く直き心」であると述べる。重要なのは、その「高く直き心」は「よろづのものの父母なる天地」の春夏秋冬という四季の大自然の中で生まれるということである。人の「直き心」は、天地の自然の動きを「わかち得る」もの、つまり天地の秩序とつながった天地の一部にほかならない。「高く直き心」を歌った歌の調べは、天地自然と一体的に調和するものととらえられているといってもよい。「いにしへ」の時代の歌はまさにそのような状況のもとで生まれたのである。ところが、時代が経つに従って、人のよこしまな心が増し、また唐国や天竺から思想・言葉が入ってきたために乱れたと、真淵は考えていた。歌も、人の心に巧みが多く、言にまことが失せてしまった。つまり「直き心」が失われてしまったのである。もともと自然とつながる自らの「直き心」を歌っていた和歌が、末世になると、わざとひねくれた複雑な内容にして言葉を用い、技巧的な歌のまねをして、⑨「直き心」の自然性を失ってし

まった。ひどく曇り穢れてしまった後世の人の心によって詠まれた歌が汚くないはずがない、と真淵はキュウダンする。c

鳥も獣も草も木も、すべての天地の自然は古えと変わるところはない。人だけがどうして昔と変わるということがあろうか。自然としての人も本来変わることはないはずだが、人は利口ぶろうとして争い、邪悪になり、世間もダラクしてきている、そう真淵はとらえていた。そのような世の中になってきたのをよくないと気づいたなら、上代にかえろうという気持ちを起こすべきだと主張する。そのように上代の純粋さにかえろうという気持ちになり、清らかな心や詞の古典に親しみながら、自分の歌を詠んだり、文を書いたりする。それによって、人の心は必ず磨き上げた鏡のように本来の自然の純粋さに戻るだろうと主張する。真淵は、人々が純粋であった上代の歌を学ぶことにより、純粋さが取り戻せると考えていた。歌に基づくある種の教育論ともいえるかもしれない。d

真淵は、古代の歌を「よく正し唱ふる」、つまり正しく音声化することで、千年前の高市黒人[*10]や柿本人麻呂[*11]といった歌人たちと、目の前でともに詠歌を聞くことができると考えていた。古えの人は、思うことを隠さず「直き心」で詠むので、詠む人の心が歌に反映される。だから古えの人の心を直接知ることができるのである。この部分に関して、酒井直樹は「古代の人びとは純粋かつ率直であったから、歌が詠まれたのと同じ状況が実現されるや、彼らの心は何の媒介もなしに直接読み手の心に届くとされた」と述べている[*12]。つまり真淵は、心がそのままことばに結びつくと信じていた。歌には詠む人の純粋な心情が表れる。その純粋な心情そのままを声（歌）にすると、それは歌を聴く人の心に直接ヒビくと信じていたのであった。e だからこそ、嘘偽りのない心情をそのまま歌に詠むことが、真淵にとっては何よりも大切なことであった。（中略）

真淵にとって和歌は、あくまで自分の心を詠むものであった。他者に共感させようとしてことさらに作る歌は、「まことのうた」ではないという。つまり、和歌というものは、本来自らの心を直接的に詠むもので、ことさら他者に理解を強要するものではない。「ひとを和する」、他者への理解と共感は結果として得られるものととらえられていた。つまり、真淵は自分の思いを声に出して詠めば、そのままの気持ちが相手に直接伝わるはずであると考えていた。もともと相手と自分との間に障壁となる垣根はなく、自分の思いそのものが歌を詠むことにより伝わる、そう信じていたと思われる。ここには、人間は本来、天地自然の秩序につながる存在であり、もともと相互了解が可能な存在であるとする人間観が認められる。自分の心と他者の心を同質の連続の相でとらえる人間観といってもよい。真淵にとっては、自分自身を清らかな直き心のままに保つことが一番大切なことだった。そのようにすればその直き心はおのずと他人に伝わると、彼はごく当たり前に考えていた。

（中略）

宣長は、武士階級、つまり政治を担い天下国家を背負う側となる、あるいは「義理」に殉じるような生き方をする者たちに対して、「私有自楽」[*13]を主張した。政治とはかかわらない自分たちの世界があるという宣言であり、「儒」という公的世界に対抗して「和歌」でつながる私的世界の表明だった。理論や教

えという儒教的規範ではなく、まさに感性でつながりあえる町人的世界の自己主張ともいえる。和歌は他者と感性レベルで共感することで、同時に自己の意識を強めたはずである。

宣長の詠歌は、容易に理解しあえない他者に対し、共感を得るための努力をすることが前提となっていた。他者の共感を呼び起こすことが歌には重要であった。宣長は、「心[*14]にあまる事を人にいひきかせても、其人(その)あはれとおもはざれば、何のかひなし」と述べる。彼は、言葉のみによる規範や論理による相互理解の困難さを自覚していた。相手に伝わらなくては「なんのかいもない」とまで言い切っている。この宣長の和歌を回路として他者と共感する共同性指向の思想は、現代の教育的課題のとりわけ「社会情動的能力」の育成を考えるうえに、大きな示唆を投げかけているのではないだろうか。つまり、いかに他者と共感して、共同性を築いていくかということは、もともとわが国の文化的伝統の文脈では考えられていたことであり、実際に根づいていたことだった。それはまた、他者との共感と共同性の体験のなかから、安定した「自己」がつくられていくという人間形成の過程でもあった点にも留意したい。宣長は、身近な、しかし容易にはわかりあえない他者を前提として、その相手に真剣に向きあい、自己の思いを伝える努力をし続けたといえる。

現代のわれわれは、親子や家族をはじめ身近な者に対しても、容易に理解しあえない他者という意識を持ち、伝える努力、寄り添う努力をしているのだろうか。また、宣長は、「文字」ではなく「声」が言葉の第一義であるととらえていた。しかし、近代の学校教育は、文字中心の教授が重視され、声の言葉は軽んじられている。目に見える「学力」や知識偏重ともいえる教育は、まさにその結果であるだろう。「認知的能力」を重視し、声を出すつまり身体動作を伴う教育の意味に思いをいたさず、われわれはそれを置き去りにしてきたのではないだろうか。身体から発せられた生の声には、つねに表情と思い(心)が豊かに表現されている。声が届く空間は、他者と共有された「場」であり、そこで声を聞くことで、人は「共振」することができる。つまり⑩声によるコミュニケーションは身体性を伴い、そこに他者と深くかかわる契機が満ちている。

(中略)

ここで和歌論を通じて検討した宣長の思想は、「社会情動的能力」育成の観点からは示唆に富む。日本の古典(とりわけ和歌集)を学び、感性を磨き、さらに、宣長流にいうならば相手の心に届く歌を詠む、つまり相手に伝わるような工夫をして言葉を選び、それを声に出していくことで、共感性を育てること、それが重要である。相手に伝わるような工夫をするというのは、また相手の心を理解し、その心に思いを馳(は)せ、寄り添うことでもある。そのための言葉を磨き選ぶことが大切である。

(榎本(えのもと)恵理『本居宣長から教育を考える　声・文字・和歌』、ぺりかん社、二〇二三年刊による。一部改変。)

注

＊1　考え方……国立教育政策研究所「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」（二〇一七年）に基づく。

＊2　本居宣長……一七三〇～一八〇一。江戸時代の国学者。

＊3　「公的立場と～ことであった」……日野龍夫「宣長と当代文化」『日野龍夫著作集第二巻　宣長・秋成（あきなり）・蕪村（ぶそん）』（ぺりかん社、二〇〇五年刊）からの引用。

＊4　かなしからむ……「かなしからめ」とあるべきところ、文法的に破格になっている。

＊5　『紫文要領』……本居宣長の『源氏物語』の研究書。一七六三年成立。

＊6　古今序……『古今和歌集』の序文のこと。なお、この段落の引用は、本居宣長の歌論書『石上私淑言（いそのかみささめごと）』（一七六三年成立）による。

＊7　賀茂真淵……一六九七～一七六九。江戸時代の国学者。

＊8　真淵が言うには～と彼は考えていた。……この部分の引用は、賀茂真淵の歌論書『歌意考』（一七六四年成立）による。

＊9　『にひまなび』……賀茂真淵の歌論書。一七六五年成立。なお、これ以降のこの段落の引用は、同書による。

＊10　高市黒人……生没年未詳。『万葉集』の代表的な歌人。

＊11　柿本人麻呂……生没年未詳。『万葉集』の代表的な歌人。

＊12　「古代の人びとは～届くとされた」……酒井直樹『過去の声』（以文社、二〇〇二年刊）からの引用。

＊13　「私有自楽」……「私（ひそ）かに自（みづか）ら楽しむ有り」と訓読する。公的生活よりも私的生活を優先する姿勢を表す。

＊14　「心にあまる～何のかひなし」……『石上私淑言』からの引用。

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字で書きなさい。（四点×五＝二〇点）

問二　傍線部①「〈心の力〉」とは、どのようなものですか。五〇字以上七〇字以内で説明しなさい。（一五点）

問三　傍線部②「浄瑠璃」について、次の語句を全て用いて、三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。（一五点）

近松門左衛門（ちかまつもんざえもん）　人形　語り物　伴奏

問四　傍線部③「儒教的人間観」とありますが、次の漢文は、君主の危難を聞き、すぐに駆けつけようとした際の臣下の言葉で、儒教的人間観の一例と見なすことができます。この漢文を現代語に訳しなさい。（一五点）

死レ君（スルハニ）義也。無レ勇（キハ）私也。不二以レ私（テヲ）害レ公（セヲ）。（『新序』）

問五　傍線部④「人のおもきうれへにあひて、いたくかなしむを見聞て、さこそかなしからめとおしはかるは」を現代語に訳しなさい。（一五点）

問六　傍線部⑤「かなしかるべき」の波線部「る」について、次の例にならって、文法的に説明しなさい。（五点）

（例）愚かなる物なり　ナリ活用の形容動詞「愚かなり」の連体形の一部
京には見えぬ鳥なれば　打消の助動詞「ず」の連体形

問七　傍線部⑥「人の心をわが心に置き換えて慮る」とありますが、次の漢文は、これに類似する内容を述べたものです。この漢文を書き下し文にしなさい。なお、「諸」は「諸（これ）を」と書き下します。（一〇点）

施二諸　己一而　不レ願、亦　勿レ施二於　人一。　（『中庸』）

問八　傍線部⑦「此こころといふがすなはち物のあはれをしる心也」の波線部「が」に最も近い意味のものを、次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。（五点）

ア　式部がところにぞ、気色あることはあらむ。
イ　雀の子を犬君が逃がしつる。
ウ　めでたくは書きて候ふが、難少々候ふ。
エ　都辺に行かむ船もが刈り薦の乱れて思ふ言告げやらむ

問九　傍線部⑧「他者との関係性について、彼が師と仰ぐ賀茂真淵とは明確な対照をみせている」について、次の問いに答えなさい。（三五点）

（一）　本居宣長と賀茂真淵は、それぞれ「他者」をどのようなものと考えていますか。違いが明確に分かるように、六〇字以上七〇字以内で説明しなさい。（一五点）

（二）　両者の「他者」に対する考え方は、詠歌に対するどのような捉え方として表れていますか。違いが明確に分かるように、八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。（二〇点）

問十　傍線部⑨「「直き心」の自然性」とは、どのようなことを意味していますか。三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。（一五点）

問十一　傍線部⑩「声によるコミュニケーションは身体性を伴い、そこに他者と深くかかわる契機が満ちている」とありますが、これに対して、あなたはどのように考えますか。具体例を挙げながら、一四〇字以上三〇〇字以内で述べなさい。（五〇点）